



# 東川角

ひがしかわづの



元々は「角」は「津野」であった。戦国時代、1589年の検地帳に「川津野之村」とあり、その頃にはまだ川津野村は東西に分かれていなかった。江戸時代、元禄年間の記録によれば東と西で別の記載があるので、それまでには各々が独立した村となっていたのであろう。

さて、その元禄年間の記録である。東川津野村の石高を見ると、新田高が本田高の2・6倍もある。これは、新田開発が進んでいたことを意味している。

四万十川に沿って開けた平地の村であるが、川の水をくみ上げる技術などない時代には、田を潤す水にたいへん困っていた。松葉川の奥から引いてくることにも幾度となく挑戦してみたらしいが、大水が出るたびに堰が流され、それはそれは難儀していたという。

そこで東川津野村の民たちは、当時、用水路建設による新田開発の成果で名のあつた土佐藩の重鎮「野中兼山(1615〜1663)」に願ひ出る。そして兼山はこれを受け、村の東方の小山の向こうに流れる仁井田川からの水路建設に着手するのである。

仁井田から東川津野までの水路掘り下げの高低差を見ていくのに、夜、水路建設の現場にたくさんの方が順番に並んで提灯をぶら下げ、



峠にある解説板

それを遠くで見ると「〇番、もうちよつと下げよ。△番、もうちよつと上げよ」という具合にして、微妙な高低を決めていったのだそう。また、この水路建設においての最大の難関は、小山に水路を通すための「人工の谷」を堀ることであった。小山を形成する強固な岩盤をどうやって粉砕するか。発破など無い時代である。何と、石工たちが「のみ」でコツコツ掘ったのである。



今も機能している水路

今もその水路は生きています。東川津野から仁井田へ抜ける小さな峠に、この水路について解説している案内板があるが、その横から水路を覗くことができる。そこには「小さな小さな溪谷」が見え、これを人間がのみだけで掘ったと思ふと驚嘆する。

現在の東川角地区の広い農地を見渡しなが、江戸初期の大工事に思いを馳せる。最初の水が流れた時の、人々の歓声が聞こえるようである。

町のうごき		人口		前月比		出生		死亡		転入		転出		適正值(mg/l)		4月11日	
町のうごき	男	8,753	-80	男	4	23	34	95	リン酸		≤ 5.0	0.211	リン酸		≤ 5.0	0.211	
	女	9,891	-61	女	4	9	28	84	硝酸		≤ 0.5	測定範囲以下	硝酸		≤ 0.5	測定範囲以下	
	計	18,644	-141	計	8	32	62	179	アンモニウム		≤ 5.0	測定範囲以下	アンモニウム		≤ 5.0	測定範囲以下	
世帯数		8,713	-29							アニオン活性剤		≤ 1.0	1.200	アニオン活性剤		≤ 1.0	1.200
										化学的酸素消費量		≤ 10.0	4.440	化学的酸素消費量		≤ 10.0	4.440

調査：大正(吾川) 資料：四万十高校自然環境部

● 四万十町ホームページアドレス <http://www.town.shimanto.lg.jp/>

※ 広報「四万十町通信」はホームページでも、ご覧いただけます。(pdfファイル)